

Q：子どもがやってみたくなるためのコツはありますか？

A：日常的に子どもが活動したくなるような環境をつくる

子どもの活動が「もっと～したい」となるような焦点化を工夫する

まずは、子どもが自分から活動したくなる環境づくりです。「今日はこれをするよ」ではなく、子どもの思いや願いを生むような入り口を用意することが大切です。

例えば、単元に入る前に牛乳パック等をたくさん用意している部屋を見せておくと、子どもたちの活動の動機付けになります。すぐに子どもは、積み重ねたり、投げたりと活動を開始します。

また、日常的に目にするということも大切です。1年生では、アサガオを育てるところが多いと思いますが、普段子どもが目にしないところにおいてしまっては、子どもとアサガオの距離は離れていくばかりです。子どもが生活する際の導線上にアサガオを置くと、どの子にも毎日世話をする態度が身につきます。置き場所一つとっても工夫することができます。

生活科の時間は、他の教科と同様に週の時間割に位置付けられていますが、教材によっては、時間割通りではない方が効果的な場合があります。したがって観察させる時間や場所、タイミングについても工夫が必要です。育てたアサガオを時には教室などに持ち込んでじっくり見せることで、思わぬ成果が上がることもあります。外で見ることで子どもは、余計な情報を目にしたり、耳にしたりすることが考えられるからです。

また、単に見せるのではなく、「今日は葉っぱさんを」「今日は茎さんね」というように焦点化することも良いと思います。

こんな手立てはどうでしょうか。ラップの芯やティッシュの空き箱を利用し、カメラを作らせるのです。新聞記者になるわけです。これは筒を覗くことで、もっとよく見ようとするようになり、また虫眼鏡を併用することで、よりくわしく見えるという状況が生まれます。

しかし、これらはあくまでも手立て、手法の話です。「見てみたい」という子どもの願いがあつてのことです。子どもがとってきた雑草も、フラワーアレンジメントなどで使うオアシスに差してあげるとよく見えるものです。そこで、教師は「比べてごらん」ということで、違いを見付けていくことがあります。

このような営みを大切にしていると、「先生、みてみて」と言ってくるようになります。子どもが表現したがっていることが、気付いていることの証拠と考えます。